俳句

大津俳句会

日ごと掃く椿の花の数も減り　井芹眞一郎

鞦韆（しゅうせん）や少女は空を飛ぶつもり　秋山　恵子

一斉に出揃ふ一人静かな　市原　初女

浜宿に一直線の春日落つ　江藤　みち

裏庭をうめつくしたる諸葛菜　大塚喜久子

紅さして枝垂桜にそよぐ風　坂本　セキ

空晴れて光の中を入学す　佐賀　久子

中空を賑やかにして花水木　高崎セイ子

途切れなく散る花びらの烈しさよ　田中ひさ美

芝桜おほひつくせる地震の庭　茶円りゅい

どの風も受け流しては若楓　原田　順子

花万朶（ばんだ）句心は今消へ失せる　武藤　規子

和太鼓の連打勢ひづく落花　森山美穂子

糸遊（いとゆう）に骨抜きされしものばかり　渡邊佳代子

俳句

つのはな句会

十九歳のアルバム脱ける蜃気楼　星永　文夫

桜咲く我が人生の稜線に　梅木トキエ

春風来てひらひら　殉情ひらひらと　塚本　洋子

逃げ水や偽装文書がその先に　酒井　豊美

春につまずき郷愁の0（ゼロ）番ホーム　志賀　孝子

さくらポポポ　津軽線にのる　田上　公代

弔（とむら）いのうしろの正面遅桜　木庭　杏子

桜散る車輪の下に思春期に　上杉　波

いくつもの尾を切り捨てて春が逝く　矢嶋　道子

ことばとは飛び交う魔物すみれ咲く　水野　春子

短歌

大津短歌会

秋たけし刈田に孤高の鷺一羽
外輪山を見すえて立ちおり　吉永　恵子

吹く風は冬尾嶺（ね）越えて我が頬に
雪の冷気をそのまま伝え来　渡辺佐代子

臘梅の花散り早も枝々に
芽ぶける緑弥生の庭に　岩下　文代

冠雪の阿蘇嶺（ね）青く鎮まれり
空晴ればれと澄みて広がる　坂本　杲子

縁側に開花初めたるカランコエ
一夜の寒に耐えられず逝く　豊岡ミツル

桜木の下に座りし斑（ぶち）の猫
時空を越えし安らぎのなか　小平　善行

短歌

万年青短歌会

二の足の思いはあれど相寄れば
いつしか賑わう老も忘れて　今村　光子

雛壇に庭の臘梅桃の花
活けて九十の春を迎える　合志　妙子

掃き終えてふり返り見る庭土に
山茶花の花音もなく散る　長野　和子

診察を終えて安らぐ帰り道
傘ももたねば時雨にぬるる　中山　春代

ゼッケンをつけたるダンプ列をなし
復興急ぐ国道の朝　磯崎テル子

縁ありて姉妹となればわれは寡婦
過去の思い出つきることなし　山内　信子

桜咲く今日を見頃といでゆけば
鶯も鳴く藪のしげみに　河北　幸一

高砂の雛を飾りて君と吾
はじまる老にぼんぼり点す　吉田　良子